

出生前診断における夫の選択

——育児に積極的にかかわっている男性へのインタビュー調査から——

岡山大学 大学院 齋藤圭介

1 目的

この報告の目的は、夫（男性）の問題として出生前診断を捉えたときに生じる諸問題を整理し、妻の身体をその対象とする出生前診断をもう一人の当事者として夫がいかに経験しているのかを明らかにするものである。先行研究で繰り返し指摘されているとおり、生殖という現象は女性と関連付けて論じられてきたため、生殖の当事者として男性が論じられることはまれであった。しかし、出生前診断をはじめとする生殖補助医療を取り巻く論点では、男性もまた生殖の当事者として議論を展開する必要が指摘されはじめている。たとえば出生前診断において、診断を受けるか／受けないか——受けたあと、結果をみてどう判断するべきか——を考えるさい、妻と夫がともにじゅうぶん話し合うことが推奨されている。こうした変化を背景に、男性も生殖の各プロセスにおいて悩んでいることが徐々に明らかになってきた。女性身体上の変化を伴う生殖について、男性が悩むということはいかなることを意味するのか。またそうした悩みは、女性が抱える悩みと、いかに・どのくらい異なるのだろうか。生殖補助医療技術の展開に伴い、生殖における男性の役割はいままでよりも大きくなってきているが、依然として男性が出生前診断をはじめとする生殖補助医療にいかに向き合っているのかは明らかではない。そこで、育児に積極的にかかわっている男性たちへのインタビュー調査を通して、彼らが出生前診断といかに向き合ってきたのかを明らかにし、男性にとっての生殖経験を考察する。

2 方法

本報告で分析するデータは、2017年秋に東京都内を中心に行った妊娠・出産・育児に関心のある男性7名への半構造化インタビューによって得られたものである。育児に積極的にかかわっている男性が出生前診断をどのようなものとみなしているのかを、MAX-QDAを用いて分析した。

3 結果

分析の結果、以下の3つの論点を析出できた。(1) 生殖補助医療技術の展開によって、少なくともある時点までは女性の身体感覚というものが必ずしも男女の共感を阻むものではない可能性が示唆された(例: 身体経験を伴わない段階での超音波による胎児の視覚化)。(2) 既存の議論では、男性の無関心さや無責任さが強調されがちであったが、出生前診断の受診の判断とその結果を誠実に引き受けようと試行錯誤する男性たちがいることが明らかになった。(3) 障がいをもって生まれてくる子にたいする考え方には、働き方との関連で論じられることが多くあった。女性にかんする先行研究との比較を念頭に置くと、性別よりもライフコースのほうが出生前診断についての考え方により強い影響を与えている可能性が示唆された。出生前診断の捉え方については男女でジェンダー差があるということを無条件に前提にすることはできず、さらに慎重な検討が必要であることがわかった。

4 結論

男性特有の生殖経験の記述を目指さい、女性の生殖経験についての語りと既存の男性表象のされ方の2つと比較をしながら検討をする必要がある。出生前診断をめぐる男性特有の生殖経験があるか否かについては、引き続き慎重な検討が必要である。

* 本報告は菅野摂子氏・柘植あづみ氏・田中俊之氏との共同研究（JSPS 挑戦的萌芽研究「男性の生殖論に向けて——出生前検査における男性の経験に関する調査」(16K13410)（研究代表：菅野摂子）による成果の一部である。